

---

# サクラの花が咲く頃に

ゆうちん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サクラの花が咲く頃に

### 【Zマーク】

Z7269C

### 【作者名】

ゆづりん

### 【あらすじ】

不良少年達の生き様や恋愛の物語。

## プロローグ

「今日から中学生か…。学校行くのなんて面倒くせーなあ。寝癖でひどい事になつている頭をボリボリと搔きながら、祐一は大きな溜息を一つついた。

祐一はもともと学校が好きだったのだが、小学校6年生の時に担任になつた、駒田という教師のお陰で学校が大嫌いになつたのだ。

祐一は背が高く、性格もヤンチャだった為に、非常に目立つた。その存在感のお陰で、駒田に祐一は目の敵にされていた。祐一の通つていた榎小学校では、大概は祐一達の悪ガキグループが何か問題を起こす。

問題といつても、授業を少しさぼったり、喧嘩や、ちよつとした悪戯、夜遊びといった程度のものだ。

それらを注意されても、自分に否があると思つた場合は、祐一は一切反抗しなかつた。

ある日、クラスメイトの給食費が無くなるという事件が起きた。駒田は真つ先に祐一達を疑い、祐一達のグループを職員室に呼び出した。

駒田は、祐一達が給食費を盗んだと最初から決め付けていた。

「正直に言えば、許してやる。」

祐一達を呼び出し、駒田は開口一番いづつ言つた。

「給食費なんて、盗んでねーよーなんで俺だつて決め付けんだよー！」

？」

身に覚えのない祐一は、潔白を主張したが、駒田は聞く耳を持たず、口答えするなとばかりに、平手打ちを食らわせた。

結局、祐一が最後まで罪を認めなかつたので、犯人は分からず、祐一の殴られ損となつてしまつたのだが、祐一が犯人ではないという事が分かつても、駒田は一切謝罪はしなかつた。

それどころか、

「日頃の行いが悪いから、こういう時に疑われるんだ」と、吐き捨てるように言つた。

祐一はこの時、生まれて初めて『殺意』というものを感じた。きっと、この気持ちを抑えきれなくなつてしまつた時、人は人を殺めるのだろうと、殺人犯の気持ちが分かつた気がした。

それ以来、駒田と顔を合わせるのが嫌で、学校もサボりがちになり、学校 자체も嫌いになつてしまつたのだ。

「祐一！ 早く支度しなさい！ 入学式に遅れちゃうでしょ！」

母親の和美が、一階のキッチンで朝御飯を作りながら、一階の自室にいる祐一に大きな呼び掛ける。

「はいはい…。朝っぱらからそんな『デカイ声出すんじゃねーよ。』ブツブツと文句を言いながらも、さつさと制服に着替えて一階へと降り、テーブルにつく。

「そろそろ出ないと遅れちゃうでしょ。急ぎな！」

入学式から我が子に遅刻してほしくない一心で、和美は祐一を急かす。

「分かつてゐるよ。なんで母ちゃんがそんなに張り切つてんだよ？」

「別に張り切つてないわよ。中学校は気持ちを入れ替えてちゃんと通つて欲しいだけよ。」

「分かってるよ。あつ！もうこんな時間なんだ…。もう行くわ。和哉達と待ち合わせしてるからさ。」

トーストを牛乳で流し込み、祐一は急いで家を出た。

神中学校の近くにある、白川神社に、小学校の悪ガキ仲間達と待ち合わせをしていた。

思ったより、早く着いてしまった祐一は、ポケットからタバコを取り出し、火をつけた。

タバコの味など、一切分からぬが、なんかカッコいいからという理由で、小学校5年の頃から吸っている。

「それにしても、あいつら遅せーなあ。まあ、時間通りに来るとほ思つてねーけど…」

独り言を呟きながら、タバコを吹かす。

「コラッ！タバコなんて吸つて、お前はうちの学校の生徒か！？」  
神社の前を通りかかった、頭の少し禿げた40代前半と思われる男が、いきなり祐一を叱りつけた。

「うちの学校つて？神中？」

「そうだ。俺は神中で教師をしている、伊藤という者だ。お前はどこの中学だ？」

「…」

祐一は黙りこんでしまった。

教師というと、駒田のイメージが強烈すぎて、全く良いイメージが湧かない。

しかし、今回の場合はどう考えても、タバコを吸っている自分が

悪い。

素直に謝るか、ウソをついて切り抜けるか、祐一は悩んだ。

入学初日から、喫煙現場を教師に見つかった自分のツキの無さを呪い、返答に困っていると、伊藤と名乗る教師は、祐一が全く予想していなかつた言葉を投げ掛けてきた。

「見たことの無い顔だが…。お前、さては新入生だな？タバコを吸うなら、もつと人目につかない所でコツソリと吸え。分かったな？タバコくらいで、俺は文句なんて言いたくないが、あまり大っぴらにやられると、立場上何も言わないワケにはいかなくなるからな。ハツハツハ。」

そう言つて豪快に笑う、伊藤という教師。ビンタの一つや二つは覚悟していただけに、祐一は呆気に取られてしまった。

「そろそろ入学式が始まる時間だぞ！」こんな所にいないで、早く学校に行け！」

伊藤はそう言い残し、学校の方向へと歩いて行つた。

「なんだ、アイツ…殴られるかと思ったけど、なんか笑つてたし…。」

駒田とは全く違う対応。祐一には理解しがたい対応だ。駒田は、祐一が何かしでかすと、待つてましたとばかりに、暴力をふるつたのに…。

「祐一！今の神中の教師だろ？何だつて？」

物陰に隠れて様子を伺っていた和哉達が、祐一の元に駆け付ける。

「タバコ見つかつたんだけど、なぜかアイツ笑つてたし…。」

「マジ！？ありえなくね？」「

「だよな。何なんだろ…。」「

「まあ、いーべ。ラッキーだつたつ一つ事で。」

「だな。そろそろ学校行くか。」

祐一、和哉、誠、博樹、邦生、薫、6人の悪ガキ連中は、入学式の時間が迫る榎中学校へと向けて歩きだした。

## 第一話・仲間

祐一達が、白川神社の裏手に位置する神中学校に到着するのには、5分もかからなかった。

昇降口には、クラス別に名前が張り出してある。

神中学校は、小さな中学校なので、一年は全部で4クラス。仲間内の誰かしらとは同じクラスになるだろうと思つていた祐一は、張り出されたクラス表を見て、目を疑つた。

和哉と誠はA組。

祐一はB組。

博樹と邦生と薫はC組。

「つづーか、なんで俺だけ1人！？意味分かんねー！」

祐一は、かなり大きな声で叫んだ。

「なんかお前らしいよな。ちょーウケる！ハハハ。」

和哉は、腹を抱えて大笑いしている。

「祐一、元気出せよ。」

「新しい友達出来るんじゃね？」

「神小で一緒だった女が祐一のクラス、いっぱいいるじゃん！いいなあ。」

「登校拒否してクラス替えしてもらえよ！」

誠達も和哉同様に言いたい事を言い、大笑いしている。

「チクショー！バカにしやがって！もついいですよ。」

祐一は、運命を受け入れたらしく、教室に向かった。

「アイツ、立ち直りも異常に早えーよな。」

誠は邦生と顔を見合せ、同時に同じ台詞を言つてしまい、また大笑いした。和哉達もつられて笑つ。

「いつまでも、笑つてんじゃねえ！お前ら、俺に続け！」

祐一が階段の踊り場から呼び掛ける。

和哉達も階段を上がり、教室へと向かう。

祐一達は知らなかつたのだが、一年生が教室へ向うルートは、一階の廊下を歩き、職員室の前の階段を上がるといつのが、袖中での一般的なルートなのだ。

昇降口前の階段を上がり教室に向うと、一年生の教室の前を通りなくてはならない。

一年生に顔がきく一年生は、祐一達が選んだルートでも問題はないのだが、祐一達は一年生からは、入学前から目をつけられていた。上級生から見たら、生意気な新入生という事だ。

「おい、見ろよ祐一達だぜ！？入学早々、一年の廊下通るつてのは、ナメてるな。」

廊下にたむろしていた一年生の一人が呟く。

「何？？こいつらめつちゃ睨んでんだけど…」

薰はニヤニヤしながら、一年生の方を見ている。

一見、祐一達の中では一番おとなしそうに見える薰だが、実は一番好戦的で喧嘩早いのだ。

「薰、今はやめとけつて。ビーセ嫌でもそのつち上とは揉める事になるんだからさ。」

和哉は冷静に薰を諭すが、視線は一切こちらを睨んでいる一年生達から逸らさない。

「和哉の言つとーり！今はとりあえず教室行くべよ。」

邦生も和哉の意見に賛成し、祐一は今にも一年生に飛びかかりそうな薰を引っ張つて歩きだした。

「イテテ。痛てーよ、祐ちゃん！ そんな力いつぱい引っ張らねーで、も、喧嘩しないから、平気だよ。」

薰は顔をしかめる。

「お前はいつキレるか分かんねーから危険なの！ トラブルメーカーの薰を黙らせるのは、毎回祐一の仕事だ。薰は、何故か祐一にはあまり反抗しない。」

昇降口から、教室までの道のりは距離のわりにはやたら長く感じられたが、祐一達は何とか始業の時間までに教室に入る事が出来た。

「はあ…。俺だけ一人つづーのはキツいなあ。」

黒板には、出席番号順に並べられた席順が張り出してある。

祐一の名前は

「矢崎」なので、出席番号は男子で最後。窓際から三列目の一一番後ろの席だ。

クラス分けは、祐一的には最低だったが、席はまあまあのポジションだったので、少し救われた気持ちになれた。

「祐一、また同じクラスだねっ！」

右隣の席からの声。声の主は、佳奈だった。

佳奈とは、小学校が一緒に、クラスも何回か同じクラスになった事がある。

茶色に染めたサラサラの髪が、いかにも今風といった感じで、男子からもかなり人気があった。

「おおっ！佳奈ちゃん！和哉達と離れちまつたけど、お前がいれば暇しねーわ。助かった。」

祐一は、心から思つたし、それをついにうつかり口に出してしまった。

「祐一つてもしかして、あたしの事、好きなんじゃないのー？？」佳奈はいたずらつ子の様な表情で微笑む。

「好きなんかじゃねーよ！ただ知り合いがいなかつたから、お前がいてよかつたと思つただけっ！」

「なーんだ…。好きなのかと思つた。」

佳奈は残念そうに呟く。

祐一は、佳奈の態度をどういつ風に取つていいのか、分からなかつた。

正直言つて、佳奈の事は小学校の頃から好きだつた。だけど、佳奈が自分の事を好きかなんて、考へた事もなかつた。

もし、佳奈が自分の事を好きだといつのなら、これほど嬉しい事はないが、お互い冗談を言い合えるような仲だし、眞に受けて突つ走るのは怖かつた。

祐一は幼いながらも、祐一の気持ちが、一方的なものであつたとしたら、それが佳奈に知れた場合、佳奈との関係が今までのものではなくなつてしまつような気がしていた。

今のように、気楽に遊んだり、話をしたりする関係を壊したくなかつたのだ。

（A組

「なあ、和哉。誰も男友達が同じクラスにいない祐二よりはマシだけども、俺らのクラスって、榎小から来てる女はカワイイの一人もいねーぞ！」

誠は、唇を尖らせながらつぶやく。

「まあ、いーじゅねーかよ。他の小学校からカワイイ女が来てるかもしけねーじゃん。」

和哉は、口には出さなかつたが、佳奈と同じクラスになれなかつた事が一番悔しかつた。

小学校低学年の頃からだから、佳奈の事を想い続けてもう5年になる。

佳奈に伝える勇気はなかつたが、和哉達のグループと仲が良い佳奈達のグループと一緒に遊んでいるだけで、和哉は幸せだつた。

「おおっ！新しい出会いってやつか！？俺らも中学に入った事だし、そろそろ彼女欲しくね？」

「まあな。第一歩として、誠はヤンキーファッションをやめた方がいいことと思う。」

「つっせー！これは俺のポリシーだ！」  
誠は、また口を尖らせた。

（C組

「祐ちゃんと一緒にクラスがよかつたなあ。」

薰は椅子にもたれかかり、天井を見上げながら不満を洩らす。

「ホントに薰は、祐一の事が好きだな。」

邦生は呆れ返った様子だ。

「薰の祐一好きは、もはや病気の領域だからな。」

博樹も邦生の後に続く。

「なんだよ？一人してそんな事言つなよ。俺は、祐ちゃんにはいっぱい助けてもらつたから、感謝してんの！」

転校生で、皆と打ち解けられなかつた薰は、祐一に遊びに誘われてから、急激に友達が増えた。

こうして、6人でつるむようになったのも、祐一がいたからだ。祐一はそんな事をすつかり忘れていたが、薰は律儀にも、今だにその恩を忘れてはいないうらしい。

（B組

ガラツ

「皆、席につけ～！入学式の前にSHIRやるぞ～。」

教室のドアを開けるなり、担任の教師は言つた。

佳奈と楽しく話していた祐一は、担任の顔を見てギョッとした。祐一のクラスの担任は、朝、白川神社で喫煙していた祐一を叱つた、伊藤という教師だつたのだ。

「ヤツベ～！俺、アイツ知つてる～！」

祐一は小声で佳奈に話しかけた。

「何で？？」

佳奈も小声で返す。

「朝、神社でタバコ吸つてたら見つかった…。」

「マジ！？初日からヤバくない？」

「コラッ！一番後ろの席の茶髪一人！無駄話しないつー！まったく、入学式早々髪なんぞ染めて…。」

注意した拍子に祐一と目が合った伊藤は、祐一の顔を見て、何やら考え込んでいる。

「えーと、君は…矢崎君だな。俺のクラスの生徒だとは思わなかつたよ。」

伊藤は、ニヤリと笑う。

「俺も、まさか伊藤先生が担任とは思わなかつたよ…。」

祐一は苦笑いしながら、気まずそうに答える。

伊藤は祐一から視線を戻し、生徒達に向かつて、こう言つた。

「今朝、矢崎君にはちょっと言つたんだが、君たちも今日から中学生だ。榎中学校は、お世辞にも良い子ばかりの中学校とは言えない。中には悪い生徒だつている。俺は悪さをするなとは言わない。俺も君らぐらいの歳の頃は、良いこと、悪いこと、色々な事に興味があつた。しかし、悪さをするなら、可愛げがある悪さをしなさい。人をいじめたり、傷つけるような行為を先生は一切許さないので、覚えておいて下さい。」

伊藤は、生徒一人一人の顔を見るようにしながら、真剣に語りか

ける。

何かある度に自分を田の敵にした駒田とは、明らかに異質な教師  
ところ事は、たった一瞬で祐一には理解できた。

「自己紹介等は、入学式が終了した後にする事にします。それでは、  
体育館に集合して下さい。」

伊藤はこう付け加え、教室を出た。

「さてと、廊下で和哉達を待つかな。」

祐一は咳きながら席を立つ。

「待つてよー祐一。あたしも一緒にいくよ。」

実は、佳奈も祐一同様に仲の良い友達とは違うクラスになってしまったのだ。

「じゃ、A組の前で待つべ。」

祐一と佳奈は、A組の前の廊下に座り込み、和哉達が出てくるの  
を待つ事にした。

「おっ！佳奈ちゃん。相変わらず、お前ら仲が良いなあ。またクラ  
ス一緒かよ？」

「一人で廊下を歩いてきた邦生が一人を見つけ、声をかける。

「やつと来たよ。薰と博樹は？」

「そろそろ愛子達と来るんじゃん。あいつら、おせーから置いてきた。それにしても、佳奈も運が悪いよな。愛子達は皆C組で一人だけB組。まるで誰かさんみてーじゃん。」

邦生は祐一の方を見ながら笑い、祐一達同様に廊下に座り込んだ。榎小学校だつた生徒達は、祐一達の事をよく知つてゐるので、挨拶程度に声をかけ、通り過ぎて行くが、他の小学校から榎中に来た生徒の中には明らかに敵意を剥き出した視線を投げ掛けてくる者もいる。

祐一と邦生は、特に揉め事が好きといつワケではないので、明らかに喧嘩を売つてゐるような生徒も、特に相手をせずに無視する。そんな事を繰り返してゐる間に、和哉と誠が教室から出でてきた。

「佳奈ー！」

和哉達が合流したのと同時に、現れた愛子が佳奈に抱きつくる。

「やーつとみんな揃つたなー！体育館行こいざ。」

祐一は、制服の尻をパンパンと叩きながら立ち上がった。

祐一、和哉、誠、博樹、邦生、薫、佳奈、愛子、早苗、里香、順子の総勢11名は、体育館に向かつた。

小学生の頃から、常にこのメンバーで行動してきた祐一達にひとつは、いつして皆と廊下を歩くのは、全く珍しい事ではないが、皆自己主張の強い外見をしている為、大人数という事を差し引いても、非常に目立つ。

茶髪や金髪、だらしない腰パン、パンツの見えそうなミニスカート、早速潰された上履きの踵…。ここまで初々しさのかけらも感じられない中学一年生は、そう簡単に見かけられないはずだ。

「あー、たりー。式とかどーでもよくね？」

両手をポケットに突っ込み、大あぐびをしながら祐一はつぶやく。

「基本的にお前はなんでも、たりーじゃん。」

和哉は、祐一の口癖を嫌という程聞いてきたので、適当に流す。

一人で話ながら歩いていると、薰達よりもかなり前を歩いていた。いつもやつて皆でどこかに向う時は、いつもこうだ。

祐一と和哉は意識して早く歩いているワケではないのだが、気付くと先頭にいる。

一人立ち止まり、皆が追い付くのを待つ。

「ホント、いつもあこづら歩くの遅せーなあ。」

「きっと、俺よりも足が短いからだ。可愛そう…。」

祐一がそうこうと、和哉と祐一は、一人して吹き出してしまった。

「てめーら、何こつち見ながら笑つてんだよお。」  
誠が一人に問い合わせる。

「なんでもねーよ。ほら、行くぜ。短足さやん達。」

「短足だあ？？」

「やつベー！和哉、誠番長がキレたぜー！」

祐一と和哉は走りだす。

「うして、仲間とふざけあえる事を、祐一はとても幸せに思う。  
駒田に田の敵にされ、荒んでいた頃、心の支えになつてくれたの  
は、仲間達だつた。

「」の仲間達がいなかつたら、きっと「」んな風に笑う事もなかつた  
だろ？。

体育館のドアを開けると、祐一達以外の新入生は並べられたパイ  
プ椅子に座り、入学式が始まるのを待つっていた。

クラス別に区切られ、並べられているパイプ椅子の空席にそれぞ  
れ腰を下ろす。

「また孤独な時間の始まりだよ…。」

祐一は咳きながら、和哉達と薰達を交互に見る。

和哉は誠となにやら談笑しているし、薰も邦生達とふざけ合つて

いる。

「つたくよお…。つまんねー。」

祐一は、外に目をやつた。

その瞬間に左隣に座っていた生徒と目が合つた。

「なんだよ?」

「俺、木田小から來た、葛田博人。矢崎祐一君だよね?」

「そーだけど…。なんで俺の名前知つてんの?」

「有名人じゃん。」

「そつか?まあいいや。俺さ、クラスに知つてる男が誰もいねーのよ。暇つぶし相手になつてくれよ。」

祐一は、友達とか仲間とか、そういう言葉を軽く使いたくなかった。

だからといって、『暇つぶし相手』という、博人にはかなり失礼な表現になつてしまつた事を、少し悪いと思った。

しかし、博人はあまり気にしていない様子なので、祐一はホッとしました。

間もなく入学式が始まり、祐一にとつてはどうでもいいような話や挨拶が、延々と続く。

そんな退屈な時間も、博人と知り合いになつたお陰で、あつとう間に過ぎていつた。

博人の話では、祐一達は自分達が思つてゐる以上に名前が売れて

い。 いるらしく、祐一達を倒して名前を売らうとしている輩も多いらし

「俺らなんか倒したって、何の自慢にもならねーのにな。」

「そんな事ないでしょ？それに、祐一君の彼女を狙ってる奴も多分沢山いるよ。」

「は？俺、彼女いねーし。」

「北原さんと付き合つてゐるんじゃないの？」

「佳奈と？別につきあつてねーよ。」

「ふーん。そうなんだ。みんな付き合つてると困つてるよ。」付合つしたいのは確かだけと祐一は心の中で付け足した

「勝手に思つてなさいつて感じ。」

博人は相当話好きの様で、話題が次から次へと出てくる。博人の質問に答えたりしていると、あつという間に入学式は終わってしまった。

祐二は入学式という言葉から、耐え難い程退屈な時間を想像していただけに、博人に少しだけ感謝した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7269c/>

---

サクラの花が咲く頃に

2011年1月13日15時11分発行